



Title	Beowulf に見られる Nominal Compounds について
Author(s)	今井, 光規
Citation	Osaka Literary Review. 1965, 3, p. 1-15
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25801">https://doi.org/10.18910/25801</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## *Beowulf* に見られる Nominal Compounds について<sup>①</sup>

今 井 光 規

複合語を合成する能力は英語史を通じて最も大きな変化を見せたものの一つであり、それを通時的に眺めることはまことに興味深いものがある。英語は複合語合成能力の大きかった Primitive Germanic の流れを受け継いでいるにもかかわらず、その能力は同じ流れに属するドイツ語などに較べると今日では非常に衰えていると言われている。又中世以後はフランス語などの外国语の造語法の影響も大きい。

複合語の分類は古代インドの文法家以来多くの学者によって試みられているが、その一つの方法として全ての複合語を syntactic<sup>②</sup> なものと asyntactic なものに分けることが出来る。前者に於ては複合語の持つ二つの構成要素が syntactic な結合をしているので構成要素間の意味の関係ははっきりしている場合が多い。ところが後者に於ては二要素間の結合が syntactic でないためにそれらの間の意味上の関係は理論上は多種多様である。我々が曖昧さを殆ど感じるのは或る一つの関係が習慣的に固定しているからである。この asyntactic な複合語は普通の syntax の規則に従った句の「圧縮された形」であるともいえよう。従ってこれら二種類の複合語の構成要素間にはしばしば類似の、或いは対応した意味の関係を見出すことが出来る。例えば次の各グループの最初の例は syntactic な複合語であり、二番目は asyntactic なものであるが各グループに於てはそれぞれ平行な意味の関係が認められる。即ち、第一のグループでは第一要素が第二要素の含む行為の手段を示してをり、第二のグループでは両要素は属格的な関係にあり、第三のグループでは第一要素がいづれも形容詞的であると言えよう。

ecg-bana (sword-slayer, i. e. slayer *with* the sword) 1262  
hand-wundor(hand-wonder, i. e. wondrous thing *by* hand) 2768

hrefna-wudu (*ravens'* wood) 2925

nicor-hus(water-monster+house, i. e. *water-monsters'* abode) 1411

lað-bite (*grievous*-bite, i. e. wound) 2670

sige-ðeod (victory-people, i. e. *victorious* people) 2204

この小稿では英語史の各時代に於て複合語の二要素間の意味の関係にどのような傾向が見られるかを探ろうとする試みの最初の段階として, OE. 最大の叙事詩であり, 英語の最も古い造語法を保存していると思われる *Beowulf*について, それに見られる nominal compounds を記述しながら, 上記の対応の具合を調べようとするものである。

一口で結論を言えば *Beowulf* に於ては, syntacticな複合語とasyntactic なものの両方に一つの意味の関係が見られる場合には後者が圧倒的に優勢であり, 見られる関係も後者の方が豊富であると言えよう。 Jespersen<sup>③</sup> は It is often maintained that English has lost the power of forming compounds found in the other Gothic languages, and even in OE. Thus it is said that numerous German compounds must be rendered in English by an adjective plus a substantive or some similar phrase ..... と述べているが私の観察の結果では, *Beowulf* に於ては名詞+名詞型の複合語の方が形容詞+名詞型のもの及び類似の句よりもはるかに優勢であり, 頭韻詩である *Beowulf* の特殊な性格を無視することは出来ないが, OE. に於ける豊かな複合語形成能力の一端を窺うことが出来ると思う。

## I Syntactic Compounds

ここでは ‘syntactic’ という用語を最も広い意味で用い, 二要素の結合が句の中の語と同じ, 又は起源に於て同じ, 文法的関係に立つ場合を指す。構成要素の分類に従って形容詞+名詞型, *Synthetica* の二つに大別される。

### (1) 形容詞+名詞型

a. *bahuvrihi* 以外のもの。

この型のものは *Beowulf* にはかなり多いが, 名詞+名詞型のものに較べ

るとはるかに少ない。大部分のものは *bahuvrihi* 複合語である。この型のものには文中の形容詞+名詞の句よりも意味の特殊化が著しいものが多い。その典型的な例をあげると、

*heah-setl* (high-seat, i. e. throne) 1087 / *heah-sele* (high-hall, i. e. palace) 647 / *heah-lufu* (high-love, i. e. king's love to people) 1954 / *inwit-gæst* (wicked-visitor, i. e. foe) 2670 / *lað-bite* (grievous-bite, i. e. wound) 1122 / *ær-dæg* (early-day, i. e. day-break) 1311 / *ær-fæder* (ancient-father, i. e. ancestor) 373 / *inwit-searo* (wicked-contrivance, i. e. enmity) 1101 / *inwit-ðanc* (wicked-thought, i. e. hostile-thought) 749  
*ðanc* の独立で用いられた時の意味は ‘thanks’ であるがここでは ‘thought’ である。*searo* は独立で使われた時には何か具体的なもの、例えば武具を意味するのが普通であるがここでは *inwit* と結合されて抽象的な意味を持っている。

Brugman④ の言う ‘isolation’ 即ちこの(意味の)特殊化は形態に於ても認められる。これは印欧語の古い時代には第一要素が語尾変化を持たぬ語幹であったことに起因する。一例をあげれば *eormen-grund* ‘spacious-earth’ acc. sing. 859 (cf. *yrmenne grund*, *Juliana* 10) である。

更にこの型の複合語には第一要素が第二要素に対して殆んど epithet になっていると思われるものが見受けられる。この現象は名詞+名詞型に於ては極く普通であるが、一種の強調であろう。第一要素に *heah* ‘high’ を持つ複合語がその良い例である。

*heah-cyning* (high-king, i. e. great king) 1039 / *heah-gesceap* (high-destiny, i. e. destiny) 3084 / *heah-gestreon* (high-treasure, i. e. splendid treasure) 2302 / *heah-lufu* (high-love, i. e. king's love to people) 1954

上例に於て *heah* は何か偉大なもの、例えば王、神、或いはそれらに属するものへの epithet であるといえよう。*eald gestreon* 1458 / *eald-sweord* 2616 / *ær-gestreon* 1757 / *ær-weorc* 1679 / などについても同じことがいえるであろう。

尚、過去分詞+名詞からなる複合語は非常に稀である。それらは全て *ba-huvrihi* として用いられている (*fæted-hleor*, *hringed-stefna* など)。

現在分詞+名詞から成る複合語はまだ *Beowulf* には見当らない。

b. *bahuvihi* 複合語。

*bahuvihi* とは *gadabout, turnkey, red-coat* などのように、全体としての機能がその主要素の機能と異り、exocentric な構造を持った複合語である。 *Beowulf* に見られる形容詞+名詞型の複合語の大部分がこの種類に属するものである。この複合語の特徴は第二要素が名詞であるにもかかわらず複合語全体が形容詞として用いられる場合が非常に多いこと、或いはそれらが metaphor (synecdoche) として用いられることである。*Beowulf* に於ては頻繁に用いられており一方では描写を豊富にし、かつ一方では歯切れの良い簡潔さを感じさせる。

stið-mod (strong-mind, i. e. stout-hearted) 2566 / werig-mod (weary-mind, i. e. disheartened) 844 / yrre-mod (angry-heart, i. e. angry) 726 / blið-heort (blithe-heart, i. e. cheerful) 1802 / grom-heort (angry-heart, i. e. hostile-hearted) 1682 / sarighaferhð (sad-mind, i. e. excited) 1806 / collen-ferhð (bold-mind, i. e. bold of spirit) 1805 / gamol-feax (old-hair, i. e. grey-haired) 608 / gearo-folm (ready-hand, i. e. with ready hand) 2085 / blodig-toð (bloody-teeth, i. e. with blood stained teeth) 2082 / fæted-hleor (ornamented-cheeks, i. e. with gold-plated head gear) 1036 / fami-heals (foamy-neck, i. e. foamy-necked) 218

興味あることは、*Beowulf* に於てはこれらの *bahuvihi* が第二要素に手、首、髪、心臓など動物の器官を示す単語を持っていて、複合語全体が生物に用いられていることである⑤。無生物に用いられたものも少数ながら見られるが注意すべきはその場合にもそれらの無生物が擬人化されているという事である。たとへば、brogden-mæl (weaved-sign, i. e. ornamented with a wavy pattern, i. e. damascened sword) 1667 / wunden-mæl (wound-mark, i. e. sword with curved markings) 1531 / wunden-stefna (wound-stem, i. e. ship with curved-prow) 220 / hringed-stefna (ringed-prow, i. e. ring-prowed-ship) 32 / brun-ecg (brown-edge, i. e. sword with bright edge) 1546 / wreoðen-hilt (twisted-hilt, i. e. sword with twisted

hilt) 1698

*bahuvrihi* にはこれまでに引用した形容詞+名詞型のもの他に名詞+名詞型のものもあるが *Beowulf* に於ては後者はわずかに二三の例を見るだけである。これらは syntactic なものではないが便宜上ここに一瞥しておく。

hring-mæl(ring-mark, i. e. ring-marked) 1521/guð-mod (war-mind, i. e. of warlike mind) 306/styl-ecg (steel-edge, i. e. steel-edged) 1533

Schroeder@ は全ての複合語を *mutata* と *immutata* に二大別している。前者は第二要素の品詞が曲げられているもの、後者は曲げられていないものを指している。そして同じところで彼は、前者が時の経つうちに後者に移行すると述べているが、*Beowulf* に於ても、名詞の形に形容詞の働きを負わされている *bahuvrihi* が *immutata* に移行したと思われるものが見受けられる。*Beowulf* に於ては次の四種類の移行が見られる。

a. 第二要素に形態の変化が見られるもの。

idel-hende (idle-hand, i. e. empty-handed) 2081/syfan-winter  
(seven-winter, i. e. seven years old) 2428/sid-fæðme  
(large-bosom, i. e. wide-bosomed) 1917

b. 第二要素に接尾辞 (-ed, -igなど) が加えられたもの。

sid-fæðmed (wide-bosomed) 302/bealo-hydig (evil-thoughtful, i. e. hostile) 723/þrist-hydig (bold-minded) 2810/grom-hydig (angry-minded) 1749 (cf, stið-hygð (firm-mind. i. e. firm-minded) *Juliana* 654)

尚このグループに属するもので *Beowulf* に於ては *mutata* であるが他の OE. 資料では *immutata* であるものがある。たとへば、

wreoðen-hilt B 1698 ; gold-hilted *Riddles of the Exeter Book* 5614/hring-mæl B. 1521 ; hring-mæled *Genesis* 1992

c. 第二要素が抽象的な意味を持つようになり、ついには接尾辞になり下ったもの。この典型的な例は -lic に見られる。この語が独立で用いられた時の意味は ‘body’ (966, 451など) である。

earm-lic (miserable-body, i. e. miserable bodied, i. e. miserable) 807/greo-lic (noble-body, i. e. noble) 615/cwen-lic

(queen-body, i. e. gueenly) 1940 / geomor-lic (sad-body, i. e. sad) 2444

d. 両要素が入れ換る場合。これは非常に稀である。（これは必ずしも移行ではない）

geomor-mod (sad-mind, i. e. sad of mind) 2044 ; mod-giomor (mind-sad, i. e. sad of mind) 2894

## (2) *Synthetica*⑦

ここに *synthetica* と呼ぶものは、構成両要素間に緊密な動詞的関係が認められる semi-syntactic な複合語を指す。これは第一要素が第二要素を単に形容しているもの、例えば形容詞+名詞型、名詞+名詞型と区別してつけた名前である。構成要素の種類に従って次のグループに分ける。

### a. 名詞+動作主名詞型

agent noun を第二要素とする複合語は OE. に、特に詩に多く、OE. 造語法の特徴をなしている⑧ が、とりわけ *Beowulf* にはその数も使用回数も多い。例えば、

gold-gyfa (gold-giver, i. e. lord) 2652 / beag-gyfa (ring-giver)  
 1102 / sinc-gifa (treasure-giver) 1012 / leod-gebyrgea (people-protector, i. e. prince) 269 / dæd-fruma (deed-doer, i. e. doer of evil deeds) 2090 / ban-loca (bone-locker, i. e. body) 742 / lað-geteona (evil-doer, i. e. loathly spoiler) 559 / al-walda (all-governor, i. e. omnipotent one) 316 / wæg-bora (wave-bearer, wave-roamer) 1440 / brim-wisa (sea-leader, i. e. sea-king) 2930

上例では、語順は異にするが Mod. E. の syntax 動詞+名詞（目的語）に見られるような強い対格の関係が見られる。このグループに -weard で終る複合語も加えて良からう。この *weard* は OE. の agent noun を造る語尾 -a を失ったものである。（たとえば gold-weard ‘gurdian of gold’ 3081, hyd-weard ‘harbor-guardian’ 1914など）

同じ構成要素を持ちながら次の例では agent noun が造られた元の動詞が自動詞である。これらの第一要素は具格や地格の関係に立つといえよう。たとえば、

sæ-genga (seā-goer; i. e. ship) 1882 / sceadu-genga (walker in darkness) 703 / æsc-wiga (spear-fighter) 2042 / ecg-bana (slayer with the sword) 1262 / hand-boña (slayer with the hand) 460 / muð-bona (one who destroys with the mouth, i. e. devourer) 2079

第一要素が第二要素を強調するために用いられたと思われるものがある。たとえば、

man-scaða (crime+one who does harm, i. e. wicked ravager) 712 / hearm-scaða (harm+one who does harm, i. e. pernicious enemy) 766 / guð-sceaða (war-destroyer) 2318

上例に於ては第二要素の動詞的な機能が増々弱まっている。第一要素は単に第二要素を強調するために置かれたようなもので、一種の同族目的語的な、tautological な複合語であろう。

#### b. 副詞+動作主名詞型

この型の複合語は第一要素に名詞を持つものに較べて非常に稀である。

in-genga (in-goer, i. e. invader) 1776 / wid-floga (widely-flier, i. e. far-flier) 2346 / an-genga (alone-goer, i. e. solitary one) 165

#### c. 名詞+現在分詞型

この型の複合語は比較的多く、同じ一つの複合語があるところでは名詞として、又あるところでは形容詞として用いられることがしばしばである。

folc-agend (folk-possessing, i. e. leader of people) 3113 / fold-agende (house-having, i. e. owner of a house) 3112 / fold-buend (earth-dwelling, i. e. earth-dweller) 2274 / ealo-drincende (ale-drinking, i. e. ale-drinker) 1945 / helm-berend (helmet-bearing, i. e. warrior) 246 / searo-hæbbend (armor-having, i. e. warrior) 237 / sele-rædende (hall-ruling, i. e. hall-ruler) 51 / mægen-agende (might-having, i. e. strong) 2837 / dream-healdende (joy-possessing, i. e. joyful) 1227 / bealo-hygende (evil-thinking, i. e. hostile) 2565

これらに於ては第一要素は第二要素の目的語の関係にあるが、次の例で

は第一要素が第二要素で意味された行為に用いる道具や場所を示している。

gar-wigend (spear-fighting, i. e. warrior) 2641 / sæ-liðende (sea-going, i. e. sea-farer) 377 / flet-sittende (floor-sitting, i. e. sitter in the hall) 1788 / mere-liðende (sea-going, i. e. sea-farer) 255

次の二例は第一要素が第二要素に対して主体関係に立つもので *Beowulf* に於ては非常に珍らしいものである。

umbor-wesende (child-being, i. e. being a child) 46 / cniht-wesende (boy-being, i. e. being a boy) 535

尚このグループには第二要素の現在分詞が名詞として独立の用法を持っているために、動詞的な関係よりも形容詞+名詞型の感じが強いものがある。たとえば上に引用した *folk-agend*, *sæ-liðend*, *mere-liðend* などである。

#### d. 副詞+現在分詞型

この型のものは殆んど見当らない。

heard-hicgende (hard-thinking, i. e. brave-minded) 394 / feor-buend (far-dwelling, i. e. far-dweller) 254 / ymb-sittend (around-sitting, i. e. neighbouring peoples) 1827

#### e. 名詞+過去分詞型

この型のものはかなり多く、第一要素が具格的な働きをしているものが多い。この型のものはその発達過程に於て、第二要素に形容詞を持つもの（例へば、*stan-fag* ‘stone-decorated’ 320, *dreor-fah* ‘gore-stained’ 485）と関係があると思われる。

hand-gewriðen (hand-bound, i. e. woven by hand) 1937 / beag-hroden (ring-adorned, i. e. adorned with rings) 623 / hond-locen (hand-linked, i. e. linked by hand) 322 / swegl-wered (sky-clothed, i. e. clothed with radiance) 606

次の例では第二要素が過去分詞であるかどうか確かでない。

breost-gehygd (breast-thought, i. e. thought of the heart) 2818 / wea-laf (woe+what is left, i. e. survivors of calamity) 1084 / yð-laf (wave+what is left, i. e. shore) 565

#### f. 副詞+過去分詞型

この型のものには言うまでもなく強い動詞的な関係が見られる。

- wid-scofen (widely-pushed, i. e. pushed far) 936 / wel-dungen (well-prospered, i. e. accomplished) 1927 / niw-tyrwed (new-tarred) 295 / forð-gerimed (forth-counted, i. e. counted up) 59 / forð-gewiten (forth-departed, i. e. dead) 1479 / eað-fynde (easily-found, i. e. easy to find) 138 / eð-gesyne (easily-seen) 1110

尚第二要素に現在分詞、過去分詞を、第一要素に否定辞 *un* を持つもの（例えば、*un-gefeðe* 2921, *un-lifiende* 468）がかなりしばしば見られるがそれらはここでは複合語としては扱わない。それらは *un-* + 形容詞型の派生語（例えば、*un-lytel* 885）と関係があろう。

#### g. 名詞+動作名詞型

この型のものはかなりの数にのぼる。次の例に於ては第一要素が第二要素の現わす動詞的な概念に対して目的語の関係にある。

- beah-ðegu (ring-receiving, i. e. receiving of a ring) 2176 / eoton-weard (giant-watch, i. e. watch against a giant) 668 / beor-ðegu (beer-drinking) 617 / eard-lufu (land-love, i. e. dear-home) 692 / lif-wraðu (life-protection) 971 / maððum-gifu (treasure-gift, i. e. treasure-giving) 1301

今まで述べてきた対格の関係が見られる純粋に syntactic な genitive compound は *Beowulf* にはまだ見られない。（次のような例も複合語とは認められていない。*since-s-brytta* ‘treasure’s distributor’ 607, *beaga-brytta* ‘rings’ distributor’ 352) cf. *boca-ræding* ‘books’ reading’ (Jespersen, MEG., VI, 151)

尚第二要素に動名詞を持つものは稀で、-weorðung ‘honouring’ で終るもののが数例見られるだけである。

- hring-weorðung (ring-honouring, i. e. adornment of rings) 3017 / breost-weorðung (breast-adorning, i. e. breast-ornament) 2504 / ham-weorðung (ornament of a home) 2998

同じくこの型に属するもので第一要素が第二要素に対して主体（主語）の関係に立つものは非常に珍らしい。（cf. *cniht-wesende* above 1(2)

c.) hra-fyll (body-fall, i. e. fall of corpses, slaughter) 277/  
 leod-hryre (prince-fall, i. e. fall of a prince) 2391/sorh-wylm  
 (sorrow-welling, i. e. surging of sorrow) 904

これに対応する関係は, *gares-fliht* 'spear's flight' 1765, *wæters-wylm* 'water's welling' 1693, *flodes-wylm* 'flood's welling' 1764などの純粹な genitive combination に見られるがそれらは複合語としては認められていない。

#### h. 副詞+動作名詞型

この型のものは多くない。

*ellor-sið* (elsewhither-going, i. e. death) 2451/*eft-cume*(back-coming, i. e. return) 2896/*fore-þanc*(beforehand-thought, i. e. forethought) 1060/*gegen-cwide* (against-saying, i. e. answer) 367/*ond-slyht* (against-strike, i. e. onslaught) 2929/*in-gang* (in-going, i. e. entrance) 1549

## II Asyntactic Compounds

*Beowulf*(3182行)に於てはおよそ5行に3個の割合で nominal compounds が現われるが、その3分の2以上がこれまでに見て来た種類以外のもの、即ち asyntactic な複合語である。この種類のものに於ては両構成要素間の関係を残らず分類することは不可能と思えるが⑧、 syntactic なものに見られた関係と比較する目的のために以下あえて一つの分類を試みる。構成要素の種類に従って、名詞+名詞型、名詞+形容詞型の二つに分けられるが本稿では後者はその数もかなり多く、重要なグループであるにもかかわらず省略する。

#### (1) 名詞+名詞型

a. 第一要素が第二要素に含まれる行為のために用いられる道具を示すものが非常に多い。この関係は syntactic compounds の形容詞+名詞型をのぞく全ての型に見出された。

*hand-geweorc* (hand-work, i. e. handiwork) 2835/*hand-wundor* (hand-wonder, i. e. wondrous thing wrought by hand) 2768/*mund-grip* (hand-grip) 965/*sex-benn*(knife-wound, i. e. dagger-wound) 2904/*sweord-bealo* (death by the sword) 1147/

fyr-bend (band forged with fire) 722

b. 第一要素が第二要素によって意味されるものに関してその位置、場所を教えるものがある。この種のものも syntactic なものの大部分の型に類似の関係を見たが、この型に於て圧倒的に多い。

sele-rest(hall-rest, i. e. bed in a hall) 690 / hand-sporu (hand-spur, i. e. nail) 986 / mere-wif (water-witch) 1519 / sæ-draca (sea-snake) 1426 / mere-stræta (sea-path) 514 / mere-fisc (sea-fish) 549 / brim-cliff (sea-cliff) 222 / meðel-word (place of assembly+word, i. e. formal word) 236 / seld-guma (hall-man, i. e. retainer) 249 / sæ-wong (sea-plain, i. e. shore) 1964 / sæ-lac (sea-booty) 1624 / ad-faru (funeral pile+way, i. e. way to the funeral pile) 3010 / wald-swaðu (forest-path) 1403

c. 第一要素が時を示すものは asyntactic なものに於てのみ多い。とりわけこの型に多いが、名詞+形容詞型（例えば, *æfen-grom* ‘angry in the evening’, *niht-long*, *morgen-ceald*）にも見られる。

morgen-tid (morning-time) 484 / uht-hlemm (dawn-sound, i. e. din at night) 2007 / morgen-sweg (morning-sound) 129 / dæg-hwil (day-while, i. e. day) 2726 / fen-leoht (evening-light, i. e. sun) 413 / morgen-leoht (morning-light, i. e. sun) 604 / æfen-rest (evening-rest, i. e. bed) 645 / niht-bealu (night-evil) 193

d. 第一要素の名詞が形容詞のような働きをしている複合語は数の上では形容詞+名詞型よりもはるかに多い。

morðor-hete (murder-hate, i. e. murderous hate or hostility) 1105 / gryre-leoð (terror-song, i. e. terrible-song) 786 / gryre-sið (terror-voyage, i. e. perilous expedition) 1462 / sige-þeod (victory-people, i. e. victorious people) 2204 / ellen-dæd (courage-deed, i. e. courageous deed) 876 / freond-lar (friend-learning, i. e. friendly counsel) 2377 / gear-dagas (year-days, i. e. days of yore) 1351

e. 第一要素が第二要素で示されるものの材料又は構成要素を示すもの。これはこの型にのみ見られる関係である。

mago-driht (warrior-troop, i. e. band of young retainers)

67/ eorl-weorod (nobleman-band, i. e. band of warriors) 2893  
 stan-boga (stone-arch) 2545/ isern-byrne (iron-corset) 671/  
 fæðer-gearwe (feather-gear) 3119/ ban-hring (bone-ring, i. e.  
 vertebra) 1567/ lig-yð (fire-wave, i. e. wave of flame) 2672

f. 第一要素が用途、目的を示す複合語はこの型にのみ見られ、その数も大変多い。それらの大部分は器、道具、武器、衣類などを示すことばである。

ealo-wæg (ale-cup) 481/ medo-ful (mead-cup) 624/ drinc-fæt  
 (drinking-vessel, i. e. cup) 2254/ medu-heal (mead-hall) 638/  
 wæll-seax (battle-knife) 2703/ searo-net (battle-net, i. e.  
 corslet) 406/ bæl-wudu (funeral-pile+tree, i. e. wood for the  
 funeral pile) 3112/ ban-fæt (bone-vessel, i. e. body) 1116/  
 heaðo-wæd (war-clothes, i. e. armor) 39/ wæl-steng (slaugh-  
 ter-pole, i. e. shaft of spear) 1638

次にあげる例に於ては、第一要素が epithet の性格を持っており、第二要素を強調するために置かれたものであろう。これらも起源に於ては目的、用途を示すと考えられよう。興味あることは、これらの例の大部分のものが *Beowulf* にだけ、しかもただ一度だけ現われる複合語であることで、これらは頭韻のための nonce formation と考えられる。

hilde-bord (battle-shield) 3139/ hilde-wæpen (war-weapon)  
 39/ here-grima (battle-helmet) 395/ here-stræl (war-arrow)  
 1435/ guð-getawa (war-armor) 2636/ guð-helm (war-helmet)  
 2487/ beado-grima (war-helmet) 2257

g. 第二要素が第一要素に「属する」、「起源を持つ」、「所有される」といういわゆる属格的な関係が認められるものがかなり多い。

nícor-hus (water-monster+house, i. e. abode of water-mon-  
 ster) 1411/ dryht-guma (lord-man, i. e. retainer) 1388/ leod-  
 cyning (people-king, i. e. king of a people) 2963/ gum-stol  
 (lord-seat, i. e. throne) 1952/ eorl-gestreon (nobleman-treas-  
 ure, i. e. nobleman's treasure) 2244/ fyr-leoht (fire-light)  
 1516

これに対応する関係は純粹に syntactic なものに於てはわずかに次の

珍らしい例に見られるだけである。これらは全て固有名詞（地名）である。

Hrefna-wudu (ravens' wood) 2925 / Hrefnes-holt (raven's woods) 2935 / Hrones-næss (whale's headland) 2805

h. 両要素が同格に用いられた複合語は非常に多く、*Beowulf* に見られる複合語の特徴の一つである。これらの中には *Beowulf* に一度限りしか見られないものが多く、頭韻のための nonce-formation と思われるものが多い。

wine-mæg (friend-kinsman, i. e. friend and kinsman, retainer) 65 / mæg-wine 2479 / maððum-sweord (treasure-sword, i. e. precious-sword) 1023 / agend-frea (owner-lord) 1883 / beadulac (battle-sport) 1561 / frea-wine (lord-friend, i. e. friendly lord) 2357 / beorn-cyning (hero-king) 2148

同格複合語の中でどちらかの要素が性を示していると思われるものは次の二例だけである。

aglæc-wif (monster-woman, i. e. monster of a woman) 1259

このグループには両要素間に tautological な関係が見られるものが多い。これに対応する関係は I(2) a. にあげた *man-scaða* などのグループにわずかに見られるといってもよからう。

maððum-gestreon (treasure) 1931 / gum-mann (man) 1028 / deað-cwealm (death, slaughter) 1670 / mægen-ellen (mighty-valor) 659 / bord-rand (shield) 2559 / hord-maððum (hoard, terasure) 1198 / ord-fruma (leader) 263 / sið-fæt (going, i. e. expedition) 2639 / mod-sefa (mind) 2628 / grim-helma (helmet) 334 / mægen-cræft (strength) 380

i. これまでに見た複合語は全て第一要素が第二要素を限定する末尾限定複合語である（同格複合語の例に於ても主な概念は第二要素に認められる傾向がうかがわれる），が次の二例は両要素間に並列の関係（即ち、それらの間に ‘and’ を補って初めてそれらの関係が理解出来る）にある珍らしいものである。

suhterge-fæderan (nephew and uncle) 1164, cf. suhtor-fæderan *widsith* 46 / aðum-sweoras (son-in-law and father-in-

law) 84

これらの並列複合語は同格複合語とよく似ているが後者のように一つのもの（例えば、*mæg-wine* は一人の主君を示している）を示すのではなく、二つ（以上）の、組になったものを並列的に示す点で異っている。

これらは *dvandva* 複合語と呼ばれるものでサンスクリット語には普通の造語法であったが英語に於ては非常に稀である。但し英語にも頻繁に用いられるのは次にあげるような数を示すものである。

feower-tyne (fourteen) 1641/fif-tyne (fifteen) 207 cf. ȝritig (thirty) 2361

i. 主な概念は第一要素にあり、第二要素がそれを限定する頭部限定複合語の例は *Beowulf* には見られないようである⑩。しいてあげれば、

gled-egesa (fire-terror, i. e. terrible fire) 2650/waeter-egesa (water-terror, i. e. dreadful water) 1260

これらは ‘abstract for concrete’ と呼ばれる詩的な表現であるが、實際には主な概念は第一要素にあるので頭部限定複合語に近いものと考えても良いかも知れない。

k. 二つの名詞から成る *bahuvrihi* 複合語については I(1) b. に於て、形容詞+名詞型のものに関連して見た。

### 註

①本稿は昭和37年1月神戸大学文学部に提出した卒論 *A Study of the Nominal Compound Words in Beowulf* の一部を中心に構想を改めたもの。もとの卒論では Introduction に於て「複合語の定義」及び「複合語の分類」の問題を扱ったがここではあえてふれない事にする。用いた Text は *Beowulf and the Fight at Finnsburg* ed. F. Klaeber (Boston, 1950). 用例の後の ( ) の中, i. e の後の訳語は Klaeber のもの、又数字は行数を示す。

②OE. に於ては言うまでもなく genitive compounds 以外は全て厳密には syntactic ではない。ここでは ‘semi-syntactic’ という意味である。この用語に関しては後の Syntactic Compounds の所を参照のこと。

- ③ *MEG*, Ⅷ, 138.
- ④ “Das Wesen der sogenannten Wortzusamensetzung”, *Berichte d. sächs. Ges. d. Wiss. phil. hist. Kl.* 52 (1900) pp. 359ff. quoted in Jespersen, *MEG*, Ⅷ, 134
- ⑤ Theo. Storch (*Angelsächsische Nominalcomposita*, Strassburg, 1886, p. 43) がすでに指摘。
- ⑥ *Ueber die Formelle Unterscheidung der Redeteile*, Leipzig, 1874, quoted by T. Storch, pp. 3, 38. 尚以下の「移行」に関しては T. Storch, p. 40 に負うところが大きい。
- ⑦ この用語は T. Storch, p. 25 に負う。
- ⑧ Herbert Koziol, *Handbuch der Englischen Wortbildungsllehre*, Heidelberg, 1937, p. 44 を参照のこと。
- ⑨ たとえば, Jespersen, *MEG*, Ⅷ, 137を参照のこと。尚, 以下の分類を試みる際に植村良一教授の「*Beowulf* における Substantive-Compound——第一要素の機能——」, 大阪学芸大学紀要A. 人文科学第7号 (1958) , pp. 199 ff. を参考にさせていただいた。
- ⑩ cf. 植村教授 (p. 215) は *middel-niht* ‘middle of the night’ 2782, 2833, *hring-iren* “steel-rings of corslet” 322 の二例をあげておられる。